

建物や家具が作る段差等に対する乳幼児の行動特性の運動発達の變化

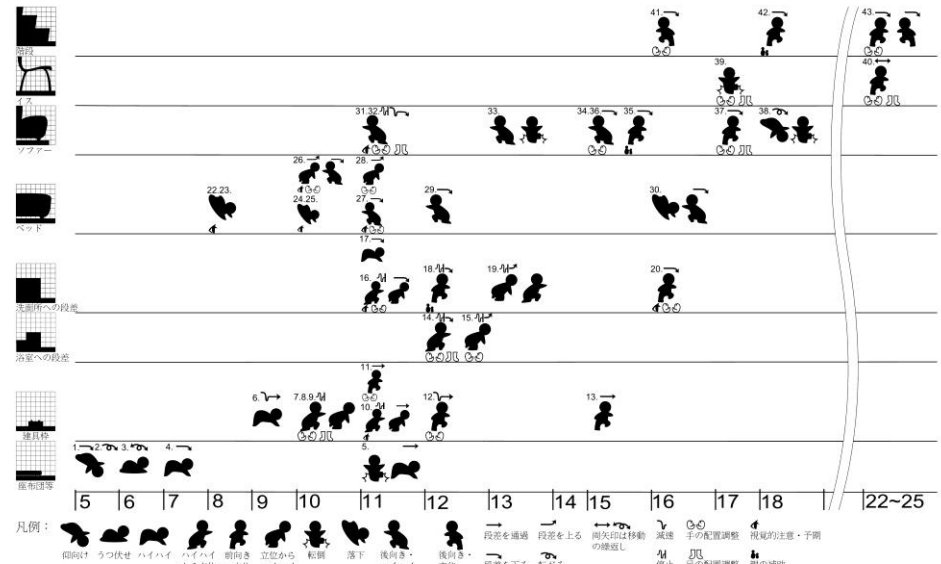
東京大学大学院

プロジェクトの目的

一人歩き以前に乳児は環境の多様なレイアウトや種々のモノに囲まれて成長し、それらは乳児の成長にもなってその意味を変えていく。行動 - 環境相補性(アフォーダンス)研究の観点から、行動と場所の重なるところを抽出して分類した。発達初期の屋内生活の実態の一端を知ることが目的とする。

実施方法

分析対象は「動くあかちゃん事典」(『アフォーダンスの視点から乳幼児の育ちを考察—動くあかちゃん事典』小学館)に収録されている男児の2名(0歳~3歳)の映像等。



場所やモノとかがわる行動事例分析:

- ・ベビーチェアによる動きの拘束、遊び道具としての父親、家具を利用したつかまり立ちなど、乳児は日常的に環境のアフォーダンスと多様な方法で関わりあっている。

結果

段差 - 行動の発達の分析:

- ・段差での行動は『落下⇒段差の探索⇒飛び越え』で推移する。
- ・段差の高低、形状などによって発達の流れが異なる。段差が周囲環境とつくる場所レイアウトが重要である。

今後の展望・展開

- ・段差 - 周囲のレイアウト - モノなど、複合的環境のアフォーダンスを検討する必要がある。
- ・養育者が環境のレイアウトをどのようにガイドするのか、乳児との相補性を中心に発達の・縦断的に検討する必要がある。
- ・以上から、新しい屋内の環境レイアウト設計への指針がもたらされる可能性がある。